

囲碁にまつわる言葉 【坐隠】

最近、国立国会図書館のデジタルコレクションで「坐隠談叢」という明治時代に書かれた囲碁史を読みました。著者は安藤如意という人です。この著作は囲碁全史の名著といわれています。この本の「碁技の渡来と奈良朝」の箇所では、囲碁(碁技)の到来は推古天皇の奈良時代であり、隋から三韓を経てもたらされたとあります。

聖武天皇の時代に、遣唐使として経書、天文曆書、日時計、楽器、音楽書、弓などを献上したことが正史に記述されていることから、囲碁ももたらされたという伝承があります。しかし、魏志倭人伝に囲碁と双六がもたらされたことが記載されているといわれま
す。従って、安藤は、吉備真備や阿倍仲麻呂ら遣唐使の留学生が本邦に囲碁を持ち込んだというのは俗説であると主張しています。



推古天皇

700年代の持統天皇や文武天皇の頃に囲碁が広まりつつあったようです。「坐隠談叢」には、その様子が記述されています。

「夫れ本邦碁技の歴史上のその事跡の一端を印したる者は、平安朝にして、此時に方りて勝雄、須賀雄父子、及び夏井などの名手を生み、竟朝儀の一節に斑して永く国技の観を垂れたるは、斯道の為、最も記憶せざる可らざる事にして、朝廷の推奨、素より力多しといえども、遣唐使外人投化の事等ありて、彼我の事物をして交互貿易せしめ、その結果、発達しつつありし碁技を助長せしめたる(略)」
「奈良の正倉院に所蔵せらるる最古の碁盤は、実に聖武帝の愛玩せられたるものとの事実あり、此の碁局(碁盤)は紫檀製にて、方一尺七寸二分あり盤面には支那の夫の如く、中二間毎に星座ありて、二十五座を記せり(略)」

―― 坐隠 ――

「坐隠」は座隠ともいわれ、碁を打つことの名詞です。碁をうちはじめると、居ながらにして隠遁するところから由来するといわれます。囲碁は座したまま隠遁できるという気持ちを表しているのだそうです。中国の逸話集に「世説新語」があります。その中に「坐隠」の説明があります。「世説新語」は、「竹林の七賢」など、後漢末から宋初までの貴族・文人・僧侶などの逸話を集めたものといわれます。「世説新語」が作られたのは、南朝宋の時代です。220年漢帝国が滅亡してから589年、隋によって中国が再び統一されるまでの時代は、北朝と異なる豊かな文化を生み出したので、この時代を文化史上、六朝時代と呼ばれています（旺文社世界史事典）。

「世説新語」の巧芸の箇所では、「囲碁を以て坐隠とす」という記述から坐隠という言葉が登場します。同書の「顔氏家訓一雑芸」には、「王中郎は圍碁を以て是れ坐隠となし、支公は圍碁を以て手談と為す」「但だ人をして耽(たんくわい)せしめ、廢喪(はいさう)實に多し。常にすべからず」という教訓めいた興味ある説明があります。「圍碁」とは囲碁のことです。

「坐隠」とは、漢の時代以降、戦乱をきらった「竹林の七賢」らが世俗の雑事から逃れて隠遁し、俗世から超越し、悪意と偽善に満ちた社会について自由な談論や清談に明け暮れし、時に囲碁を囲んだことから出た雑称ともいわれます。



坐隠 (画：原田朋栄)

(2023年6月23日 大和田囲碁同好会 成田 滋)